

## 遅咲きの桜

もうすぐ 40 歳、実習に行けば教員と間違われる年齢で看護の世界に飛び込んだのは、おとし 9 歳で亡くなった息子との約束を守るためだ。

息子に異変を感じたのは 3 歳の頃だった。毎食しっかり食べていてもどんどん痩せ細り、肺炎と呼吸困難で入退院を繰り返すようになった。次第に入院期間は伸びていき、付き添いが必要な息子と病院で暮らす日々が始まった。

深刻な顔をした主治医から別室へ案内され「嚢胞性繊維症」の可能性があると告げられた。予後が悪くて聞いたこともない病気の説明をされてもなかなか信じられず、よくわからないうちに大学病院への紹介状を握りしめていた。翌週、大学病院へ検査のために受診すると臓器移植の登録を薦められた。臓器移植はテレビやニュースの話題としてなんとなく知っていたが、まさか自分の息子がその対象になるとは思いもしなかった。登録してもかたちだけで、宝くじに当たるような確率の連絡など一生こないと期待していなかった。

平成 26 年 11 月 23 日、家の電話が鳴った。「大学病院です、ドナーが見つかりましたので今すぐ病院へ来てください。」私達の人生はこの電話をきっかけに大きく変わった。病院へ向かう車の中で不安と期待が入りまじり、息子の手を握りしめてぼろぼろ泣いた。

移植後は劇的な回復をみせ、予定より 1 ヶ月も早く退院することができた。退院の日は桜がさきはじめ、新しい季節と人生に歓迎されているようで嬉しかった。毎日の免疫抑制剤の服薬や感染管理は大変だったが地元の小学校に通うことができるようになり、やっと子どもらしい時間が戻ってきたと喜んだ。しかし、春は長く続かなかった。

風邪のような症状が気になり受診すると、拒絶反応だと言われて緊急入院となった。どうしてもっと早く受診しなかったのかと主治医に叱られている時、息子が「おかあさんは僕の看護師さんやねん。僕の命を守ってくれてるから悪くないねん」と私を庇った。臓器移植に対する知識のなさで 1 ヶ月も早く退院できたのだから大丈夫と思い込んだ自分の甘さを恥じた。慢性の拒絶反応に対しパルス療法を繰り返した体は移植から 1 年を迎えることができず、よく晴れた日の朝、眠るように逝った。

机に飾った写真を見るたび、私は息子の死を経験する。時間が後悔を拭い去ってくれることはない。息子にできなかった看護を学び、おかあさん看護師から本物の看護師になろう。病気で苦しむ患者さんと家族に寄り添い、少しでも痛みと不安を和らげることができるような看護師になりたい。まわりより咲き始めるのは遅いけれど、必ず咲いてみせるからね。